日本語の自然会話における悪態の対象

関崎　博紀

1．はじめに

コミュニケーションの方法には，各文化に共通する部分と，文化によって異なる部分がある。その異同を明らかにし，会話教育に貢献することを目指して，近年，自然会話における言語行動を分析した研究が数多くなされている。その中には，他者に理解・共感されたいという欲求であるポジティブ・フェイス（Brown & Levinson 1987）を脅かす言語行動である，断りや不同意を取り上げたもの等がある。一方で，一見すると相手のポジティブ・フェイスを脅かす言語行動が，実際の会話では，相手のポジティブ・フェイスを満たす場合もある。例えば悪態は，実際の会話の中では，笑いを誘い相手を楽しませることがある（関崎 2005）。このような言語行動は，相手と親しさを深めるのに貢献しうるものである。ここで注目すべきことは，どのような事柄を対象として悪態がつかれているかである。対象とすることが許されている事柄と許されていない事柄の区別も，文化によって異なる可能性があるからである。日本語母語話者が親しみを込めたつもりで悪態をついたとしても，留学生など日本語を母語としない者にとっては，それがタブーに触れるものであるおそれがある。逆の場合も考えられよう。しかし，これまで日本語の自然会話における悪態の対象を分析した研究は，筆者の調べた限り見当たらない。

本研究は，悪態という言語行動の異文化間比較のための基礎研究の一つとして，日本語による悪態の対象を分析する。本研究では，自然会話の中における悪態[1]を，「会話の相手その人やその行動，発話，認識，および，それが好意を抱いている人物，ものごとに対して，否定的な評価

を述べる言語行動」[2]と定義する。そして，自然会話資料の中でそれに該当する発話を特定し，どのような事柄が対象となっているのか明らかにする。

2．先行研究

本節においては，まずポライトネス理論を概観し，その理論から悪態がどのように捉えられるか述べる。続いて，悪態の対象に関する研究を概観する。

2－1．ポライトネス理論とそこから見た悪態

Brown & Levinson（1987，以下 B&L）は，人間がもつ基本的な欲求として，フェイスを提示している。フェイスには，他者に理解・共感されたいという欲求であるポジティブ・フェイスと，他者に邪魔されたくない，立ち入られたくないという欲求であるネガティブ・フェイスがある。これらのフェイスを脅かす行動を FTA（Face Threatening Acts）という。特定の行為がフェイスを脅かす度合いは，聞き手の話し手に対する相対的力[3](P)，話し手と聞き手の社会的距離（D），当該の行為がその文化においてどの程度相手に負担をかけると見なされているかという負担の度合い（Rx）の３要素によって決まるとされている（B&L:76）。それを軽減するためにとる行動をポライトネス・ストラテジーと呼ぶ。ポライトネス・ストラテジーは，それがフェイスを脅かす度合いを軽減する際に満たすフェイスに応じて，ポジティブ・ポライトネスとネガティブ･ポライトネスに分けられる。ポライトネス・ストラテジーは５つに大別され，特定の行為がフェイスを脅かす度合いに応じて選択される。

1．コミュニケーション上の意図を明示する。軽減行動をとらず，直接的に行動する。
2．コミュニケーション上の意図を明示する。軽減行動をとる（ポジテ

ィブ・ポライトネス)。
3．コミュニケーション上の意図を明示する。軽減行動をとる（ネガティブ・ポライトネス)。
4．コミュニケーション上の意図を明示しない。
5．FTA を行なわない。

特定の行為がフェイスを脅かす度合いが高いほど，番号の大きいストラテジーが選択され，逆に，低いほど，番号の小さいストラテジーが選択される。ポジティブ・ポライトネスには，フェイスを脅かす度合いを軽減する他にも，他者の欲求に共感を示したり，自分と他者の欲求に見られる類似性を表現したりすることも含まれる（B&L:101)。

ポライトネス理論から見ると，本研究が扱う悪態は，相手のフェイスを脅かす FTA であると言える。そのため，良好な人間関係を目指すうえでは避けるべきものである。しかし，一方で，星野(1974)によると，悪態には，好意や親愛の表現としての積極的な悪態もあり，「集団の中の個人を結合させ連結させる機能」もあるとされている。この仕組みは，リーチ(1987)を見ると説明がつく。リーチ(1987:210)は，話者同士の関係が親密になればなるほど丁寧に振舞うことが必要でなくなることから，「丁寧さの不足は，本質的に親密性のしるしとなりうる」としている。

このように悪態は，ポジティブ・ポライトネスとして使われうる。関崎(2005)は，非常に親しい大学(院)生同士の自然会話を分析し，それが会話の相手を楽しませる効果があることを実証的に示している。しかし，そこでは悪態がどのような対象に向けられているかについては，言及がない。

2－2．悪態の対象に関する研究

悪態の対象と関わる研究に，山田(1985)，関(2003)，水島(2004)，大津(2004)が挙げられる。山田(1985)は中学生123名に対して，悪口に関

するアンケート調査を実施し，その結果を報告している。深く傷つく悪口としては，性格・性質のこと，身体やスタイル・顔などのこと，親や兄弟姉妹のことなどが上位に挙げられている。この結果について山田は，「身内の悪口を言われれば，直そうと思ってもなかなか直しようのない性格や性質，体のことなど自分の次に痛みを感じるのである」と分析している（p. 67）。これは，相手を傷つける悪口の大まかな傾向を指摘している点で非常に興味深い。しかし，山田（1985）では，好意や親愛の表現としての悪口は分析されていない。そのため，それがどのような対象をとっているか，なお検証の余地がある。また，山田（1985）の調査方法は，アンケート調査であるため，そこで見られた結果は，実際の言語行動と齟齬がある可能性も残されている。例えば，「男子の方が女子に比べて悪口をよく言っているようだ」という観察が報告されているが，一方で，調査用紙への記入は男子の方が少なかった，という結果が見られる（山田 1985:65）。

関（2002）は，漫才を資料として，そこに見られる悪態の対象を分析している。それによると，悪態の対象として「思考・発想」や「衣装・容姿」，「家族・家庭」等が挙げられている。このうち，「家族」等は，山田（1985）において悪く言われると傷つくと報告されているものである。このような結果に関して関（2002:28）は，漫才という場では「日常的にはディスコミュニケーションともなる言語行動が，効率的におかしみを生み出している」と指摘している。通常避けられる言語行動が笑いを誘うという点は興味深い。ただし，漫才という場面で見られた悪態は，自然会話では見られない可能性がある。逆に，自然会話の中で見られる悪態の対象は，漫才の場においては，「おかしみ」を生み出さないものとして取り上げられていない可能性もある。

水島（2004）は，自然会話に見られる，話者間の事前の想定に基づいて疑似批判的なコメントが喚起される言語現象（「つっこみ」）を分析している。これによると「つっこみ」は，故意に自明の事象を曲解したり，

常識から逸脱した発話や振る舞いをしたりする行為である「ぼけ」によって喚起される場合，勘違いや言い間違いに向けられる場合等があると報告されている。大津(2004)は「遊び」としての対立がどのように始められるかを明らかにしている。この中で大津は，遊びとしての対立の開始方法には，「遊びとしての対立を開始したいと思った会話参加者が自ら対立を表明することによって始める方法」と，「わざと誤ったことや理不尽なことを言い相手が対立表明をするように仕向ける方法」の２通りがあるとしている（p. 47)。この両者の研究は，自然会話における悪態の対象に言及してはいるが，それを包括的に解明することが主眼ではない。そのため，故意になされる曲解や話の逸脱以外の対象は分析されていない。

３．会話の収集方法とデータの概要

会話は，非常に親しい間柄にある同性の日本語母語話者の大学(院)生による二者間会話20組（男女各10組）とした。男性と女性による会話を収集したのは，からかいの場合には，性別によって対象とする事柄が異なるという報告（Boxer & Cortes-Conde 1997）があるからである。協力者には研究目的は伝えず，20分程度話すよう依頼した。その際，「こんな機会だから言える，普段相手に対して抱いている印象」という話題を設定した[4]。会話の場所は，最もリラックスできる場所として協力者自身に指定させた。会話終了後，フォローアップ・アンケートの記入を依頼し，協力者同士の親しさや会話の自然さを確認した。この会話を，BTSJ（Basic Transcription System for Japanese，宇佐美 2003）に従って文字化した。各協力者は，女性はＦ(Female)，男性はＭ(Male)と，それぞれに続く任意の番号によって識別する。表１に自然会話資料の概要を示す。

この会話・文字化資料から，まず，上述した悪態の定義に当てはまる発話を特定した。集計は，発話文[5]単位で行った。下の例１の場合には，

表１．自然会話資料の概要

	男性	女性	全体
組み合わせ数	10	10	20
総文字化分数	230	236	466
１会話の平均分数	23.6	24.3	23.9

悪態が２つあると集計する[6]。その結果，245例（男性148例，女性97例）の悪態が確認された。

例１　悪態の集計方法の例。以下の会話では，悪態が２つあると集計する。
　１M10〈授業の前に，〉{〉}授業の前にー（うん），５分ぐらい教科書見た。
→2 M09〈笑い〉そんなん，誰だってやるから〈笑いながら〉〈二人で笑い〉。
→3 M09 そんなん，どんな，どんなバカでもやるから〈笑いながら〉（〈大きな笑い〉）。

次に，245例の悪態の対象となっている事柄を分類した[7]。分類にあたっては，実際に発話された悪態に基づいて分類基準を設けることはしなかった。なぜならば，実際に発話されたものだけを見ていては，発話することが控えられるような悪態にどのようなものがあるのか，明らかにできないからである。そこで，分類の基準は，自然会話における「ほめ」を分析した金（2005）に求めた。「ほめ」は，悪態と同じく相手を評価する言語行動である。そして，その評価が肯定的であるという点において悪態の対極に位置づけられる。その評価の対象は悪態にも通じると考えた。悪態を分類するにあたり，金（2005）の「ほめ」の対象の定義に改変を加え，そこに「思考」という分類を加えた。各分類とその定義は，表２に挙げるとおりである。

表２．悪態の対象と各定義

悪態の対象	定義
① 所持物	相手が持っている、または身につけている物理的な物。
② 外見	外から見た人の姿・容貌のうち、変わらない、生まれつきの顔や体型などの容貌。
③ 外見の変化	外から見た人の姿・容貌のうち、一時的に変化した顔や体型などの容貌。
④ 才能	ある個人の一定の素質、または訓練によって得られた能力そのもの。
⑤ 遂行	素質や才能を用いて何かに達し、成功するために実行する過程や結果。
⑥ 性格	各個人に特有の、ある程度持続的な、感情・意思の面での傾向や性質そのもの。行動を伴わないもの。
⑦ 行動	性格から現れるような行い、あるいは性格がわかるような振る舞い。
⑧ 思考	実験の会話における当該の発話の中に現れた相手の信念や想像。動作を伴わないもの。
⑨ その他	①～⑧に該当しないもの。

４．結果と分析

本節では，分類結果の提示[8]と分析を行う。４－１において全体の結果を，４－２において男女別の結果を提示する。

４－１．全体の結果と分析

まず，表３に245例の悪態を分類した結果を提示する[9]。

表３．悪態の対象の分類結果

	7	8	6	9	4	5	2	3	1	合計
頻度	91	65	44	14	9	9	7	6	0	245
割合	37.1	26.5	18.0	5.7	3.7	3.7	2.9	2.4	0	100
標準偏差	3.1	1.5	1.6	0.5	1.3	0.8	3.5	1		

表３から，「７．行動」，「８．思考」，「６．性格」に対する悪態が，それぞれ37.1％，26.5％，18.0％見られ，これらが全体の80％以上を占めていることが分かる。一方で，「１．所持物」に対する悪態は見られない。また，「３．外見の変化」，「２．外見」，「５．遂行」，「４．才能」は，それぞれ４％以下しか見られず，それらを合計しても全体の15％以下しか見られない。この結果には，悪態の対象となる事柄が，相手の本質とどの程度近いかが関与していると考えられる。外見やその変化，才能やそれを用いて成功しようと努力した結果・過程は，相手の好みや人格が強く表れるものである。それゆえ，相手の本質により近い事柄と言える。これらを否定的に評価することは，相手の存在自体の否定につながりかねない。そのため，これらに対する悪態が少なかったのだと考えられる。これに対して，行動や思考は変えることができるものであり，本質から比較的離れた事柄であると言える。そのため，比較的多く見られたのだと考えられる。しかし，悪態が多く見られた対象のうち，「６．性格」はその人の本質的な部分である。また，「７．行動」，「８．思考」に分類された悪態はどのようなものだったかについても，実際の会話データを確認する必要がある。そこで，以下では，「７．行動」，「８．思考」，「６．性格」のそれぞれについて，自然会話データを分析する(10)。

まず，「７．行動」に対する悪態を分析する。ここに分類された悪態には，相手の普段の行動に対するもの，相手が語っている話の内容を理解したことを示すもの，相手の常識を逸脱した発話や行動に対するもの，

相手の冗談に応じてつかれたものが見られた。また，助言としての機能を強く有していると判断されるものも見られた。

例２には，批判や非難といえる悪態の例を挙げる。M03 と M04 がサークルでの振る舞いについて話し合っている場面である。M04 は，下級生に責任感を持たせるためには，上級生である自分たちが何もせず，下級生自身に運営方針を決めさせるのがいいと意見を述べている。その中で，M03 が下級生に指示を出すようなメールを出したことを取り上げ（１），それをしない方がいいと否定的に評価している（２，４）。それに対して M03 は，上級生があまりに何もしないのも無責任だと受け取られて，和を乱すことになると反論している（８，９，10）。M04 はその内容を聞いても，M03 が指示を出すメールを出したのが時期尚早であったと悪態をついている（11）。

例２　「７．行動」に対する悪態の例。M04 が M03 のとった行動に対して批判的に悪態をついている。

1 M04 ＝だからー，例えば，お前す，水曜にやったほうがいいとか流してたでしょ?。
→2 M04 あれも，もうやんない方がいい。
3 M03 あー。
→4 M04 ほんとやんない方がいい。
5 M03 なるほどね。
6 M04 うん。
7 M03 いや，だけどー[強調するように]，ほら４年生の気持ちと同じよ。
8 M03 ４年生ってさー（うん），当事者じゃないからほっぽらかして，「人名22」君が言ってたよ（うん）。
9 M03 もう「人名21」君とかひどいもんだぜって（うんうん）。
10 M03 ステマネ[11]のこととか，もう私は知らないっていう感じだっ

て言われたの，「人名22」君に，「人名23」さんはそう〈いう〉{<}。

→11 M04 〈でも〉{〉} ねー，知らないっていうかね，だから，それで動かなかったらー，ある程度の時間，動かなかったら言わなきゃいけないけどさー（うん），まだ別に，昨日のお前のあの時点で，別にお前が動く必要性はまだないわけよ。

続く例３に，相手が語っている話の内容を理解したことを示しているものと捉えられる悪態の例を挙げる。F06 は，歯を磨いていたことを途中で忘れてアイロンがけや勉強を始めたという失敗談を語っている（１，３，５，６，７，９，10，12）。その際，「すごい，第２弾があってね」（１），「なんかビックリして」（３）など，自身でも驚いた様子で興奮気味に語っている。この失敗談を語る F06 の発話と発話の間に，F05による悪態が見られる（８，11）。これらの悪態は，F06 による語りの途中でつかれている。しかし，F06 の話を遮って，自らの体験談や相手の失敗への批判を展開することはしていない。悪態をついた後も，F06 の話を聞きながら，あいづちや笑いなどで反応を返している（９，10，12）。悪態をつかれた F06 も，悪態を気にする様子は見せず，語り続けている（９，12）。これらのことから，F05 による悪態は，相手の語りを聞きながら，その内容を理解したということを示すものとして用いられていると判断した。

例３　「７．行動」に対する悪態の例。F06 が失敗談を語っている発話と発話の間に，F05 による悪態が見られる。これは，相手の話を理解したということを示したものだと判断できる。

1 F06 すごい，第２弾があってねー（うん），なんかね，歯を磨いてること忘れちゃって，違うこと始めちゃったの。

2 F05 え[↑]，こうして?。

3 F06 なんかビックリして，あ，それ，でも，自分は磨き終わってたみたいなんだけど（〈笑い〉）。

4 F05 歯磨き粉残ってた？〈笑いながら〉。

5 F06 でも〈笑いながら〉，でもなんか，うちの母親とか，そういう私にはすごく慣れてるからー（うん），あのー，なんか，私の部屋にコンコンてきて（うーん），“なんか，なんかやってたんじゃないのー？”って（〈笑い〉）。

6 F06 “なんか忘れちゃってないかなー”とか言って登場したのね。

7 F06 〈笑い〉でねー，〈下に行って,,〉{〈}

→8 F05 〈普通じゃない〉{〉} よね〈笑いながら〉。

9 F06 下に行ってみたら，歯ブラシがおいてあってー（うーん，うんうん），なんか，歯磨きのキャップも外れたまんまで（〈笑い〉），このへ，なんか，だ，散らばってるの，全部が〈笑いながら〉。

10 F06 で，アイロンもかけたんだけど（うん），アイロンもおいてあって（うん），で，アイロン台も出しっぱなし（うんうんうん）で，なんかねー,,

→11 F05 〈笑い〉病気だよ，〈それ〉{〈}〈笑い〉。

12 F06 〈アイ〉{〉} ロンやってたんだけどー，歯磨いたんだけどー（〈笑い〉），もう勉強してんの。

続いて，「８．思考」に対する悪態の分析結果を示す。これに分類された悪態には，何らかの事柄に対する相手の推測，判断，想像に対するもの，行動予定についての提案に対するもの，相手の言い間違いや勘違いに対するものが多く含まれていた。以下の例４は，推測に対する悪態の例である。F01 が，野球のポジションであるショートの名前の由来について話している（１，９，11，14，16）。その中で，野球は元々10人で行われていたこと，セカンドとピッチャーの間にもう１つポジションがあり，それをショートと呼んでいたことを述べている。しかし，F01 は

「ショート」の由来として話している内容に絶対的な自信を持っていたのではない。そのことは，「10人でやってたのはほんと」と人数に関する内容のみ確信を持っていると話している点(21)や，由来に関しては曖昧に「そんな感じ」と述べている(23)点から伺える。このようなF01に対してF02は，懐疑的な態度をとり，悪態をついている（19，20)。

例４　「８．思考」に対する悪態の例。F02は，F01の推測に対して悪態をついている。

1 F01 だから，ピッチャーの後ろに，ショートともう一人，こう，〈二人いたのよ〉{<}。

（７ライン省略）

9 F01 ショートと〈こっち側に,,〉{<}

10 F02 〈セカンドいたんだ〉{>}。

11 F01 二人いてー。

12 F02 あーあー。

13 F02 え，そうだったんだ。

14 F01 だか，もともとはピッチャーの後ろにいたから(うん)，近い，から。

15 F02 ショートなの。

16 F01 そう。

17 F02 ほんとに？＝。〈若干笑い気味に〉

18 F01 ＝ショート〈笑いながら〉。

→19 F02 ほんとに？。〈若干笑い気味に〉[より疑った感じで文末を上げている]

→20 F02 今作ったでしょ？，その場で〈若干笑い気味〉。

21 F01 ちがう，ちがう，10人でやってたのはほんと〈軽く笑いながら〉。[主張している感じ]

22 F02 あー，うんうんうんうん。

23 F01 まー，そんな感じ〈軽く笑いながら〉。

最後に，「６．性格」に対する悪態の分析結果を示す。これに分類された悪態には，普段抱いている印象に対するもの，初対面の時の印象に対するものが多く含まれていた。後者には，助言としての機能をより強く有していると判断できるものが含まれている。性格は，その人の本質的な事柄である。このような事柄に対する悪態が多く見られたのには，会話収集の際に話題を提示したことが影響していると考えられる。例５に挙げた会話を見られたい。例５では，筆者が渡した話題を確認した（１，２）ところから，それに沿った会話がなされている。その中で，M04 は M03 に対して「怖い」（３），「思いやりが足りない」(16)，「デリカシー不足」(18) と悪態をついている。しかし，M03 は性格に対する悪態をついた直後，相手を傷つけないように配慮を見せている。例えば，「怖い」（３）と述べた直後には，その怖さの肯定的側面を述べている（４）。また，「デリカシーがない」の後には，「デリカシーがなくても，演奏会がうまくいっている」と述べ，やはりその肯定的側面を指摘している (19)。さらに，「まあ，大丈夫じゃないかと思っていますけど」(23) と，それまでの普通体から丁寧体に文末を変化させ，改まって述べている。これらのことから，性格に対する悪態が，相手のフェイスを強く脅かすと M03 が考えていたであろうことが伺える。例５に挙げた会話以外にも見られた普段の印象に対する悪態も，筆者の提示した話題に沿って中で見られることが多かった。

例５　「６．性格」に対する悪態の例。悪態の後に相手に対する配慮が見られる。

1 M04 う，つ，み，見して。

2 M04［M04 は話題の書いてある紙を見る］〈笑い〉。

→3 M03 早く，熱いー，えーっと，怖い，えー（〈吹出すように大笑い〉）。

4 M03 まー，怖いのはその練習の厳しさってことだからまあいんだけど，熱い，厳しい，えーー，できる，かな。

（8ライン省略）

13 M03 他は別に…，別にこんな機会だから，でもないよね。

14 M03 いつも言ってるよね。

15 M04 ふんふんふん。

→16 M03 思いやりが足りない〈笑いながら〉。

17 M04 ははははは〈大きな笑い〉。

→18 M03 デリカシー不足かな。

19 M03 でも，まー，そ，どんだけあれでも，デリカシーがなくても，演奏会がうまくいってるのを見ると，そういうのも大事かなと思うわけで。

20 M04 ふんふんふん。

21 M03 多分だ，多分，この，今後，今後もこんな，そ，どんだけおれ達が言っても変わんないだろうからー〈笑いながら〉。

22 M04 まあね。

23 M03 まあ，大丈夫じゃないかと思っていますけど〈軽く笑いながら〉。

現在の相手の性格を評価することが回避された場合も見られた。例6は，筆者の提示した話題の入った封筒を開けた直後の会話である。M13が当該の話題に沿って話し始めた（3）後，M14は，「『M14 あだ名』」に対しては」という発話までは「うん」とあいづちを打って聞いている。その直後に，相手の発話を途中でさえぎって発話している（4）。M13による「『M14 あだ名』」に対しては」という発話の後には，何らかの評価が続くと予想される。M14がその言葉まで聞いた段階で発話を続けさせなかったのは，自身の性格に対して悪態をつかれる危険性を回避したと見ることができる。このことから，M14が第一印象から話すことを提案

した（４）のは，普段の印象を話すことの回避であったと考えられる。

例６　話題を転換することにより，普段の様子を評価されることを回避していると考えられる会話の例。M14 は，初対面の印象について話すことを提案することによって，普段の様子を評価されることを回避している。

1 M13 こんな機会だから〈笑いながら〉。
2 M14 難しいな〈笑いながら〉。
3 M13 おれ別にでも，「M14 あだ名」に対してはー（うん）【【。
4 M14 】】じゃ，まず，第一印象からいこう。
5 M13 第一印象？。
6 M14 うん。

以上，本節では，悪態の対象の全体の傾向を分析した。そのうち特に多く見られた「７．行動」,「８．思考」,「６．性格」に対する悪態に関しては，実際の会話資料を分析して，どのようなものが見られるかを明らかにした。

４－２．男女別の結果と分析

続いて，全体の結果を男女別に提示し，分析する。まず，以下の表４に，男女別に見た悪態の対象の分類結果を示す。

表４から分かるように，男女とも悪態の対象となるのは「７．行動」が最も多く，続いて「８．思考」,「６．性格」という結果になっている。そして，それらを合計すると男女それぞれの合計の80％以上になるという結果が男女ともに見られる。

男女間で共通した傾向は,「７．行動」に対する悪態が最も多く見られることと,「１．所持物」に対する悪態が見られないことである。一方，男女間で傾向に違いが見られるのは,「８．思考」,「６．性格」,「５．遂

表４．男女別に見た悪態の対象の分類結果

男性	7	8	6	5	2	9	4	3	1	合計
頻度	54	36	30	9	7	6	3	3	0	148
割合	36.5	24.3	20.3	6.1	4.7	4.1	2	2	0	100
標準偏差	3.4	1.7	1.6	0.8	3.5	0.6	0.7	0.7		

女性	7	8	6	9	4	3	5	2	1	合計
頻度	37	29	14	8	6	3	0	0	0	97
割合	38.1	29.9	14.4	8.2	6.2	3.1	0	0	0	100
標準偏差	2.7	1.3	1.9	0.5	1.7					

行」,「２．外見」である。「８．思考」に対する悪態は，男性が男性全体の24.3％（36例）であるのに対して，女性は女性全体の29.9％（29例）となっており，女性の方が高い割合で見られる。また,「６．性格」に対する悪態は，男性が男性全体の20.3％（30例）見られるのに対し，女性は女性全体の14.4％（14例）にとどまっており，男性の方が高い割合で見られる。性格に対して悪態をついたのは，男性が10名であったのに対し，女性は４名にとどまった。「５．遂行」については，男性が９例見られるのに対して，女性の方は全く見られなかった。この９例は，５名の話者によるものであった。「２．外見」も，男性が７例見られるのに対し，女性には全く見られなかった。「２．外見」と「３．外見の変化」を合わせた場合，男性が10例であるのに対して，女性は３例のみであった。男性の10例は４名の話者によるもので，女性の３例は１名の話者によるものであった。

５．考察とまとめ

本節では，上述の結果を考察し，本研究のまとめを行う。データに見

られた悪態を分析した結果，「７．行動」や「８．思考」など特定の対象に向けられる悪態が多いことが明らかになった。それは，これらの対象が相手の本質から比較的遠い事柄であり，また努力によって変えることが可能な事柄であることから，これらに対する悪態が相手のフェイスを脅かす度合いが相対的に低かったためであると考えられる。例２に挙げた会話で，相手の行動に対して，「やらない方がいい」「お前が動く必要はない」と批判や非難ともいえる悪態がつかれていたのは，このためであると考えられる。このような事情に加えて，「７．行動」や「８．思考」に対する悪態が多く見られたのは，それがポジティブ・ポライトネスとして用いられることが多かったからだと考えられる。例３のように，失敗談を相手が興奮気味に語っている際に見られた悪態は，話を聞いている，話の内容を理解しているということを伝えるものである。これは，相手のポジティブ・フェイスを満たすものである。また，相手の常識を逸脱した言動や冗談に対する悪態は，それが期待されている場面でつかれる[12]と，ポジティブ・ポライトネスとなる。なぜならば，相手の期待を理解したということが相互に示され，相手のポジティブ・フェイスを満たすからである。「８．思考」に含まれる，言い間違いや勘違いに対する悪態も，ポジティブ・ポライトネスとなる。このような言い間違いや勘違いに敢えて言及することが，その程度では動じない話者同士の関係を示すことになるからである（B&L:104）。「８．思考」には，例４のように，相手の想像や推測，判断を否定的に評価していると捉えられるものと，ポジティブ・ポライトネスと判断できる悪態が多く見られた。

リーチ（1987:210）は，「丁寧さの不足は，本質的に親密性のしるしとなりうる」という原理を唱えた。しかし，単純に丁寧さを少なくすればよいのではない。場合によっては，相手を本当に傷つけてしまうからである。丁寧さを欠いてもよい場合と，保つべき場合があるはずである。そのような境界の一つが，本研究から明らかにできたと考える。「１．所持物」，「２．外見」，「３．外見の変化」，「４．才能」，「５．遂行」に対

する悪態は，少なかった。これらの対象は，好みや人格を反映した，よりその人の本質に近いものである。そのため，これらに対する悪態は，フェイスを脅かす度合いが相対的に高い。また，フェイスを脅かす度合いの高さゆえに，ポジティブ・ポライトネスとしても用いにくかったのだと考えられる。それが，これらの事柄に対する悪態が少なかった原因であると考えられる。「６．性格」に対する悪態は総数の18％と比較的多く見られた。しかし，例５に見られるように，悪態の後に相手に配慮する発話を続けるなどの措置が取られていた。また，例６のように，相手から性格を評価されること自体が回避される場合も見られた。これらのことから，「６．性格」に対する悪態も相手を傷つける危険性は高いものであると考えられる。

続いて，男女別の結果について考察する。男女ともに，「７．行動」に対する悪態が最も多かった。男女ともに，「行動」に対する悪態は，フェイスを脅かす度合いが低いと考えていたこと，及び，ポジティブ・ポライトネスとしての悪態を多用していた結果であると考えられる。性別による違いの一つは，男性の方が女性に比べて，多様な事柄に対して悪態をついていたことである。例えば，外見や性格，遂行などに対する悪態は，男性の方が多く見られた。これらの対象への悪態に，男性は比較的寛容なのだと考えられる。それに対して，女性は男性よりも抵抗を感じていると考えられる。一方で，女性による悪態の方が高い割合で見られた対象もあった。例えば，「８．思考」に対する悪態である。相手の推測や判断，提案への悪態がフェイスを脅かす度合いに関しては，女性の方が男性に比べて低く考えているのだと考えられる。

以上，本研究においては，悪態の対象を分析した。そして，相手の本質との近さに応じて，悪態の対象となりやすいものとなりにくいものがあることを明らかにした。対象ごとに分類された悪態の中にどのようなものが含まれるか、本稿では大まかな傾向を述べるにとどまった。今後この点を追究することで、悪態の特徴をよりよく明らかにできると考え

る。また，行動や思考などに対する悪態は，いかにそれがフェイスを脅かす度合いが低いとはいっても，常に明示的で直接的であるとは考えられない。互いの関係が壊れないようにするための工夫がなされているはずである。その工夫として，例えば話し手の意図や配慮を正確に伝える合図（contextualization cues, Gumperz 1982）や言語表現の選択，非言語行動などが複雑に関与しているはずである。それらを明らかにすることが，今後の研究課題となる。

記号凡例：本稿で用いた記号凡例（宇佐美 2003を一部簡略化して記載）

。　［全角］[13] 1発話文の終わりにつける。

,,　発話文の途中に相手の発話が入った場合，前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ，改行して相手の発話を入力する。

,　②　全角］1発話文および1ライン中で，日本語表記の慣例の通りに読点をつける。

②発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。

“　”　発話中に，話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合，その部分を“　”でくくる。

？　疑問文につける。

＝　＝　改行される発話と発話の間(ま)が，当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短いか，まったくないことを示すためにつける。これは，２つの発話(文)について，改行していても音声的につながっていることを示すためである。

…　文中，文末に関係なく，音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。

〈　〉|<|　同時発話されたものは，重なった部分双方を〈〉でくくり，重ねられた発話には，〈〉の後に，|<|をつけ，そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ２つ|>|をつける。また重ねた方の発話には，〈〉の後に，|>|をつける。

[　]　文脈的情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように，音声上の特徴（アクセント，声の高さ，大小，速さ等）のうち，特記の必要があるものなどをそのラインの最後に記しておく。

(　)　短く，特別な意味を持たない「あいづち」は，相手の発話中の最も近い部分に，(　　)にくくって入れる。

〈　〉　笑いながら発話したものや笑い等は，〈　〉の中に，〈笑いながら〉，〈2人で笑い〉などのように説明を記す。

「　」　「全角」トランスクリプトを公開する際，固有名詞等，被験者のプライバシーの保護ために明記できない単語を表すときに用いる。

【【　】】　「全角」第1話者の発話文が完結する前に，途中に挿入される形で，第2話者の発話が始まり，結果的に第1話者の発話が終了した場合は，「**【【　】】**」をつける。

注

（1）本稿で扱う悪態は独自に定義したものであり，野次や捨て台詞等のいわゆる「悪態」よりも広い概念である。また，「悪口」や「けなし」とも異なり，語彙自体が否定的評価を内包していなくても否定的に評価していると捉えられる場合も含んでいる。

（2）「はい/いいえ」による返答が可能な疑問文に対してなされる否定的返答や，疑問文の形式をとっている発話が悪態であるか否かは，文脈や音声上の特徴から総合的に判断した。

（3）力関係の相対性に関しては，カーストの最高位であるバラモンは，下の階級の者の訪問を受ける際には最高の敬意でもてなされるが，下の階級に属する者が公務を遂行する能力を持ち，それをあてにする時には奴隷的な態度まで受け入れる，という説明がされている（B&L:79）。

（4）話題を記した紙を封筒に入れておき，会話開始後，任意の時点において封筒を開けるよう依頼した。その話題では話しづらい，話題について話すことがなくなった，等の場合には，渡した話題を離れてもよ

いと伝えた。

（5）BTSJ では，「実際の会話の中における『文』」という意味で「発話文」という用語を用い，基本的な分析の単位とする（詳しくは宇佐美2003参照）。

（6）会話例を挙げる際には，宇佐美(2003)を簡略化して提示する。

（7）分類結果の信頼性は，調査協力者の分類結果との一致率を測定し，判断した。一致率の詳細については，Bakeman＆Gottman(1986)を参照されたい。

（8）結果は頻度の高い順に提示する。

（9）調査協力者との分類結果の一致率は，k＝0.78であった。これは，直感的判断が伴う分類においては安定した一致度とされている。詳細は，西郡(2003)を参照されたい。

(10) 以下，会話例を挙げる際には，各分類の中で比較的多く見られた種類のものを提示する。また，文字化資料中の各記号については，本稿末尾の記号凡例を参照されたい。

(11)「ステージマネージャー」を省略した語だと考えられる。

(12) このようなコミュニケーションについては，水島(2004)が詳述している。

(13) 宇佐美(2003)では，検索の際の便宜を図り，各記号は「半角」で統一することを原則としている。ただし，凡例中に[全角]とある記号は，「全角」で表記する。

参考文献

宇佐美まゆみ(2003)「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』，平成13－14年度　科学研究費補助金　基盤研究C(2)（代表研究者：宇佐美まゆみ），研究成果報告書，4－21.

大津友美(2004)「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス―「遊び」としての対立行動に注目して―」『社会言語科学』第6巻第2号，社会言語科学会，44－53.

金庚芬(2005)「会話に見られる『ほめ』の対象に関する日韓対象研究」『日本語教育』124号，日本語教育学会，13－22.

関綾子(2003)「おかしみの生成における『悪態』のレトリック―漫才を資料として―」『文体論研究』第49号，日本文体論学会，26－35.

関崎博紀(2005)「親しい日本語母語話者同士による悪態―会話教育への示唆―」，宇佐美まゆみ(編)『言語情報学研究報告6　自然会話分析と会話教育』，東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」，141－164.

西郡仁朗(2003)「自然会話データ『偶然の初対面』の公開～その方法論について～」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』，平成13－14年度　科学研究費補助金　基盤研究C(2)（代表研究者：宇佐美まゆみ），研究成果報告書，87－98.

星野命(1974)「あくたいもくたい考―悪態の諸相と機能―」『季刊人類学』第2巻3号，京都大学人類学研究会，29－52.

水島梨紗(2004)「発話の連関における疑似批判的コメントの機能と伝達について―『つっこみ』と呼ばれる言語現象とその相互作用―」『国際広報メディアジャーナル』No.2，北海道大学大学院国際広報メディア研究科，53－72.

山田暁生(1985)「子どもと悪口―その意識と実態」『言語生活』第三九八号，筑摩書房，62－68.

ジェフリー・N・リーチ著，池上嘉彦・川上誓作訳(1987)『語用論』，紀伊国屋書店.（Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics.* London: Longman.）

Boxer, D., & Cortes-Conde, F. 1997. From bonding to biting: Conversational joking and identity display. *Journal of Pragmatics.* 27. 275–294.

Brown, P., & Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some universals in language*

usage. Cambridge: Cambridge University Press.

Bakeman,R., & Gottman, J. M. 1986. *Observing interaction: an introduction to sequential analysis*. Cambridge University Press.

Gumperz, J. J. 1982 *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.